特異な内容物がみられた下顎智歯嚢胞の1例

佐藤田鶴子**・土川幸三**・園山 昇**
岡田忠久*・高橋秀太郎*・河越正顕***

A case parodontal cyst of the lower third molar containing specific substance.

Tazuko SATOH**・Kohzoh TSUCHIKAWA**・Noboru SONOYAMA**
Tadahisa OKADA*・Hidetaro TAKAHASHI*・Masaaki KAWAGOE***

ま え が き

歯周嚢胞の一型として下顎智歯遠心側に付着した嚢胞を H. Hofrath¹⁾ は 1930 年、下顎智歯嚢胞と命名している。

この嚢胞は日常、臨床において、下顎智歯抜歯に際し、その小さいものは時折、経験するところであるが、私共はこのたび19才女性で、下顎智歯埋伏症の状態で来院した患者に比較的大きな本嚢胞を認め、智歯と共に一塊として摘出したところ、従来の概念から考えられる漿液性の内容液は存在せず、脂肪様物質が含まれていた症例に遭遇した。私共はこの内容物について生化学的に脂肪酸について検索したので臨床所見とあわせて報告する。

症 例

患 者：[] 女性 19才 []

初 診：昭和[]年[]月

主 訴：[8] 部の不快感

既往歴、家族歴：特記すべき事項はない。

現病歴：約2年前に[8] 周囲歯肉部の発赤・腫脹・開口障害が生じたため某歯科にて切開排膿手術を受けた。その後、1年前にも同様の症状を呈し、抗生物質、消炎剤等の投与により消炎したため、本院へ抜歯を依頼され、

来院したものである。

現 症：[8] は埋伏状態であり、[8] 部の歯肉はほぼ健康色を呈し、[8] 歯槽頂部から遠心にわたり約 1cm の一条の瘻痕があり、[7] 遠心歯肉嚢は約 3mm で、そこより探針を挿入することにより歯牙様物が触知出来る（写

写真 1

写真 2

* 日本歯科大学口腔外科学教室第1講座（主任：宇賀春雄教授）

** 日本歯科大学口腔外科学教室第2講座（主任：園山昇教授）

*** 日本歯科大学病理学教室（主任：須賀昭一教授）

* First Department of Oral Surgery, Nippon Dental College (Chief: Prof. Haruo Uga)

** Second Department of Oral Surgery, Nippon Dental College (Chief: Prof. Noboru Sonoyama)

*** Department of Pathology, Nippon Dental College (Chief: Shoichi Suga)

受付 昭和49年11月30日

真1).

X線所見：「8 はやや低位でわずかに遠心傾斜を示し歯冠遠心部につらなった桜実大球形の境界明瞭なX線透過像が下顎骨内に認められる。そしてその境界線は智歯遠心部の歯根膜線に連続している (写真2)。

処置ならびに経過：以上の所見並びに既往歴等より左側下顎智歯嚢胞と診断，局所麻酔の許に「8 近心及び歯槽頂部を切開，骨を一部削除し，歯牙と嚢胞とを一塊として摘出した。創傷部の治癒経過は良好で，約2週間後，術後に生じた開口障害も消退，また，左側頤神経領域の麻痺も約半年後に回復した。

摘出物所見：「8 は単根で嚢胞は「8 遠心部歯根膜と連続して付着し，ほぼ桜実大，比較的強靱な壁で全体にやや黄色を帯びている (写真3)。

内容物所見：室温において帯黄色バター様，無臭の物質であり，氷室保存により，バターの固まった状態に類似している。また，このものの少量を生理食塩水に稀釈し鏡検したが，コレステリン結晶はみられなかった。

内容物の生化学的所見：この物質が脂肪様であるところから脂肪酸について島津製，ガスクロマトグラフ装置 GC-5A 型を使用し，その分離を行った。試料作製順序は表1のごとくである²⁾³⁾ (表1)。

なお，試料をガスクロマトグラフで分析するに際し，表2の条件の下で行った(表2)。その結果，ミスチン

酸，パルミチン酸，ステアリン酸，オレイン酸，アラギジン酸，ペヘニン酸，その他数種の脂肪酸を含んでいることが判明した。

表 1 試料作製順序

I) 脂肪の抽出

1. 試料 0.126g にエーテル・アルコール(1:3) 20ml を加え，75°C，30分間還流。
2. 沈澱物濾過。
3. 抽出液を減圧乾固。

II) 脂肪酸の遊離

4. メタノール 24ml，KOH 1.1g を加え 85°C，3時間還流。
5. 減圧下でメタノール除去，温水 10ml に溶解。
6. 硫酸を加え酸性とし (pH 1~2)，脂肪酸を遊離。
7. エーテルを 15ml 加え，遊離脂肪酸を抽出 (4 回)。
8. 減圧下でエーテル除去。

III) エステル化

9. 2%塩酸メタノール 20ml を加え，75~80°C，2時間30分還流。
10. 減圧下でメタノール除去。
11. *n*-ヘキサン 7ml で脂肪酸メチルエステルを抽出 (3 回)。
12. 減圧下で *n*-ヘキサンを除去。
13. 試料 0.5ml

写真 3

表 2

病理組織学的所見：「8」とその根側付近に形成された嚢胞とを一緒に切片として作製した試料の H・E 染色像では、歯牙においては歯髄の一部に硝子様変性が見られる他には特別な変化はない。嚢胞の壁は主に緻密な結合組織からなっており、それは歯牙の遠心側歯頸部に付着連絡し、「8」の歯根膜へ移行しているのがみられ、「8」と接合する歯肉嚢付近にのみ円形細胞浸潤が限局している所見が認められる。また、嚢胞の内面は規則正しい重層扁平上皮で被われている(写真4)。

写真4 上：弱拡大 下：強拡大

考 案

下顎智歯はその位置的、解剖的關係などから萌出困難であることより周囲炎を起しやすい状態にある。このような慢性炎症という持続的刺激により嚢胞を生ずるということは1879年 Darby によって初めてその症例により報告がなされ、その後、Weiser, Arkövy らの基礎的研究後⁴⁾、1930年、Hofrath¹⁾により詳細な研究がなされ、この嚢胞を Hofrath 下顎智歯嚢胞と命名された。それによると、この嚢胞は下顎智歯遠心部に発生し、X線所見の上からは単房性で口腔粘膜に由来する歯肉嚢から二次的に侵入し、歯肉嚢後方において増殖し形成したものであるとしている。その後、その発生及び上皮の由来に関しては Witzel らの歯根膜上皮説、Büchtemann らの口腔粘膜上皮説、Fahkson らのエナメル上皮説などがあ

げられているが⁵⁾、その発生機転について、諸家の報告に見られるように慢性炎症性刺激により生ずるものという考えが大方を占めており、その組織像は歯根嚢胞のそれに類似するものとされている。

本嚢胞の壁は一般に重層扁平上皮と結合組織からなり、Hofrath, Wail はその一部に皮脂腺^{1,6)}を、また、日比野⁴⁾は粘液腺の存在を認めたと報告しているが、本症例においては、結合組織の内面を重層扁平上皮により被われており、特別な所見は認められず、ただ「8」との接合する歯肉嚢付近にのみ円形細胞浸潤が限局してみられた。

嚢胞の内容物についての報告はほとんどなく、わずかに Bauer⁶⁾は顆粒状の一部硝子様変性した物質があったことを記載しているのにとどまる。

歯周嚢胞及び類似の病態像をもつ歯根嚢胞においても一般にその内容液は漿液性のものであるが、本症例ではその内容物はバター様で、そのガスクロマトグラフによる分析によっても数種の脂肪酸を含んでいることが判明し、この脂肪の由来については嚢胞壁での皮脂腺の存在を疑ったが、鏡検した範囲では発見できず、おそらく嚢胞の内容液が相続く炎症により変性したものか、または感染により生じた膿汁様物から変化したものなどが推察できるが、その由来については確論しがたい。

む す び

- 1) 私共は19才女性の左側下顎智歯嚢胞の1症例を経験し、局所麻酔下に智歯と共に、一塊として摘出した。
- 2) 摘出した嚢胞の内容物は特異な所見を呈し、バター様であり、特にこのものの脂肪酸についてガスクロマトグラフを使用し検索した。
- 3) この嚢胞壁の病理組織学的所見としては緻密な結合組織からなっており、その内壁は規則正しい重層扁平上皮により被れていた。

本論文の要旨は昭和49年11月、第19回日本口腔外科学会総会において発表した。

引用文献

- 1) H. Hofrath : Über das Vorkommen von Talgdrüsen in der Wandung einer Zahncyste, zugleich ein Beitrag zur Pathogenese der Kiefer-Zahnzysten. Dtsch. M. Zahnheilk., 2, : 65-76 1930.
- 2) 久野吉雄, 他 : 口腔底表皮様嚢胞の1症例について. 日口外誌 14 : 141~144 1968.
- 3) 長谷川明, 他 : 乳児に見られた大きな口腔底表皮様嚢胞の1例. 日口外誌 18 : 187~191 1972.
- 4) 日比野勉 : ホフラート氏下顎智歯嚢腫2例. 臨床歯科 14 : 405~410 1942.
- 5) 佐藤伊吉 : 下顎智歯部に現われたいわゆる辺縁性嚢胞について. 歯科学雑誌 6 : 371~376 1949.
- 6) W. Bauer : Über zystische Bildung im Kiefer. Z. Stomat. H 3 1927.